

谷川遺跡 3

—第5次調査—

大野城市文化財調査報告書 第215集

2024

大野城市

たに がわ
谷川遺跡 3

—第5次調査—

大野城市文化財調査報告書 第215集



2024

大野城市

序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦 665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と自然に囲まれた緑豊かな街です。市域は南北に長く、大野城跡、水城跡、牛頸須恵器窯跡の3つの国史跡をはじめ、多くの文化財があります。

谷川遺跡は下大利4丁目に位置し、これまでの調査の結果水城跡西門から北側にのびる古代の官道がみつかっています。

今回報告する第5次調査では、官道に面した場所の土地利用の状況を明らかにすることができました。

今後こうした成果を積み重ねていくことで、ふるさとの先人たちの暮らしぶりが明らかになるとともに、今に生きる私たちが地域の歴史の積み重ねの上にあることを知る機会となることを期待しています。

本書が学術研究はもとより、広く一般に活用され、地域歴史の解明や歴史教育の一助となり、文化財愛護の精神を醸成する手掛かりとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりご理解とご協力をいただきました関係者各位に対しまして、厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例言

1. 本書は、2014 年度に大野城市教育委員会が個人住宅建設に伴って発掘調査を行った「谷川遺跡第 5 次調査」の成果報告書である。
2. 発掘調査は地権者より委託を受け、大野城市教育委員会が行った。
3. 発掘調査は龍友紀が担当した。
4. 遺物写真は株式会社写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
5. 遺構実測図中の方位は座標北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
6. 遺物実測図は仲村美幸、小嶋のり子、古賀栄子、篠田千恵子、小畑貴子、津田りえ、氷室優、松本友里江、眞田萌世が作成した。
7. 図面の浄書は小嶋が行った。
8. 遺物観察表は龍が作成した。また、遺物は総番号とし、挿図と図版で統一した。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院発行の 1/25,000 電子地形図を使用し、各市の遺跡包蔵地分布図をもとに作成した。
10. 本書に使用する土色名は『新版標準土色帳』農林水産省技術会事務局監修を使用している。
11. 本書の執筆・編集は龍が行った。
12. 本書に掲載した遺物・実測図・写真はすべて大野城心のふるさと館が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	6
IV. まとめ	
1. 遺跡の位置づけ	8
2. 大型土錘について	8

挿図目次

第1図	既往調査区配置図（1/2,500）	2
第2図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	4
第3図	調査区遺構配置図（1/50）	5
第4図	SX01 土層図（1/40）	6
第5図	SX01 出土遺物実測図（1/3）	7

表目次

第1表	谷川遺跡第5次調査遺物観察表	10
-----	----------------	----

写真図版

図版1	(1) 調査区完掘状況（南東より）	(2) 調査区完掘状況（西より）
図版2	(1) 調査前風景（南東より） (3) SX01 検出状況（南より）	(2) 作業風景
図版3	(1) SX01 北壁土層（北側） (3) SX01 北壁土層（南側）	(2) SX01 北壁土層（中央）
図版4	出土遺物写真	

I . はじめに

1. 調査に至る経緯

谷川遺跡は大野城市下大利四丁目周辺に広がる遺跡で、これまで5地点の発掘調査により、古代から中世にかけての遺構が確認されている。遺跡は水城の西門から北西方向の大宰府と鴻臚館を結ぶ古代官道、通称「西門ルート」沿いに広がっている。調査区から北西約50mの地点に位置する第1次調査地では古代官道跡が確認されており、今回の調査区はその推定官道ルートからは15mほど東の地点にあたる。

調査区は下大利4丁目739番1に所在し、特別史跡水城跡の西側に広がる吉松丘陵から北東に派生する丘陵の麓付近にあたる。平成26年6月12日に実施した確認調査により、地表下110～120cmの深さで遺構・遺物が確認された。当該地では柱状改良を伴う個人住宅の建設が予定されており、計画通り工事が進むと遺構が破壊されることから、文化財を保護するための協議を行ったものの、遺構保護は設計上困難であった。そのため発掘調査による記録保存を行う必要があると判断し、事業者から提出された埋蔵文化財発掘調査依頼書・承諾書について平成26年10月7日付けで建設図面を添えて発掘届を福岡県教育長宛に提出したところ、平成26年10月22日付けで発掘調査を実施する旨指示が出された。発掘調査の期間は平成26年11月5日から11月28日までである。調査は国庫補助事業として実施し、また費用は市と国で50%ずつを支出した。発掘調査を行った面積は約62㎡である。

発掘調査の実施・報告書作成に際し、多大なるご理解を頂いた地権者並びに関係者の皆様には記して感謝の意を述べたい。

2. 調査体制

平成26年度（発掘調査）

大野城市長	井本 宗司
大野城市教育委員会教育長	吉富 修
ふるさと文化財課長	平田 哲也
係長	石木 秀啓、徳本 洋一、白壁 伸太
主任技師	林 潤也、早瀬 賢、上田 龍児、齋藤（龍）友紀
主事	椛島 里絵子
嘱託職員（調査）	朝岡 俊也、天野 正太郎、梶原 詩織、川村 博、 坂井 貴志、森 貴教
（庶務）	井上 絵美子
発掘調査作業員	倉住 孝枝、田中 悦子、田野 和代、野崎 美智子、 松尾 純子、宮原 ゆかり

令和5年度（整理作業・報告書作成）

大野城市長	井本 宗司
大野城心のふるさと館長	赤司 善彦

大野城市地域創造部長	日野 和弘
心のふるさと館文化財担当課長	石木 秀啓
係長	林 潤也、上田 龍児
主査	濱田 裕之（～令和5年6月）
主任主事	下川 みお（令和5年7月～）
主任技師	龍 友紀、山元 瞭平
会計年度任用職員	（調査） 澤田 康夫、石川 健
	（庶務） 清水 康彰、藤田 香
	（整理作業） 仲村 美幸、小嶋 のり子、古賀 栄子、篠田 千恵子、 小畑 貴子、津田 りえ、氷室 優、松本 友里江、 眞田 萌世
	（事務補助） 井之口 彩子、西村 恭子



第1図 既往調査区配置図 (1/2,500)

Ⅱ．位置と環境

大野城市は福岡平野の南東部に位置し、南北に細長い瓢箪形の市域をなす。市域の北側には井野山・乙金山・四王寺山、南側には牛頸山とそこから派生する丘陵が広がる、山に囲まれた地形である。市北部から中央の平野部には宝満山を水源とする御笠川が流れ、市の中央部で南部から流れる牛頸川と合流して博多湾に注いでいる。平野部から山裾にかけては縄文時代以降多くの遺跡が分布しており、山に囲まれた地形にあって平野や河川は古くから交通路として機能していた。

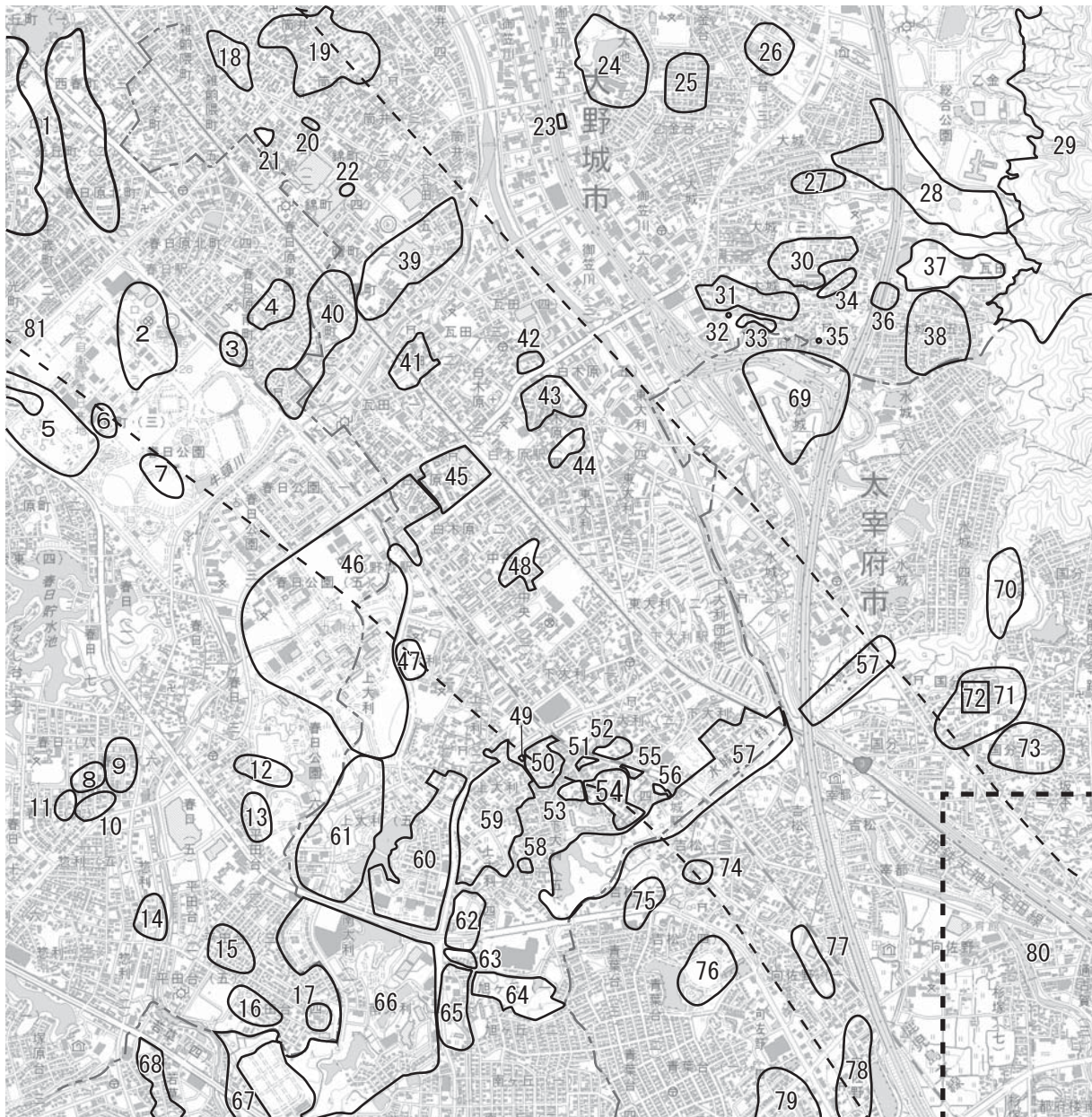
谷川遺跡は牛頸方面から延びる丘陵の西裾部、水城跡から北西約 300 mの地点に位置しており、北側およそ 100 m地点に御笠川の支流のひとつである平田川が流れている。これまでの調査で弥生時代から古代、中世にかけての遺構・遺物が出土し、中でも本調査区の北西約 50 m地点にある第 1 次調査では奈良時代の官道の側溝とみられる溝跡が確認されている。水城跡西門を通り大宰府から鴻臚館に延びる古代官道、推定西門ルート上にあるものと考えられている。中世以降では、第 4 次調査で 11 世紀から 12 世紀代の土器のほか、12 世紀代の井戸などが確認されており、本遺跡はこの二期間を中心に営まれたものとみられる。

周辺の遺跡として、664 年に築かれた水城跡が有名であるが、前述のルート上では太宰府市前田遺跡、島本遺跡、大野城市御供田遺跡、春日市春日公園内遺跡、先ノ原遺跡などで道路状遺構が確認されており、ほぼ直線的に敷設された古代官道の存在が明らかとなっている。これらは一部後世の道路や地割りにも踏襲されており、現代にあってもその面影をみることができる。

このほか各時代の遺跡を概観していくと、弥生時代には周辺に同時期の遺跡は少なく、谷川遺跡の南西約 300 m地点にある出口遺跡や、同じく平田川沿いにある上園遺跡で弥生時代の遺構・遺物が出土しているが、いずれも散発的な出土に留まっている。古墳時代になると上園遺跡で 5 世紀代の陶質土器が表採されている他、ロクロピットなど須恵器生産工房を含む 6 世紀代の集落跡が確認されるなど、活発な生産活動が営まれるようになる。その後奈良時代にかけて牛頸須恵器窯跡が全盛期を迎えるとともに、遺跡数も増加していく。8 世紀代には、谷川遺跡から丘陵を上がって数十 m地点に位置する天神田遺跡で住居跡や須恵器窯跡が確認されており、盛んな人的活動が認められる。そして 9 世紀に入ると遺跡は減少し、牛頸須恵器窯跡も 9 世紀半ばには操業を停止する。9 世紀から 10 世紀代にかけての遺跡は全国的な傾向と同じく総じて希薄ではあるものの、小水城関連遺跡で当該時期の遺構が確認され、遺構外ではあるが八稜鏡が出土している。また上園遺跡の北側に隣接する本堂遺跡で掘立柱建物や竪穴住居跡、溝跡といった集落関連の遺構や遺物、谷部からは呪符木簡や墨書・墨画土器などの祭祀遺物も多くみられる。

遺跡周辺で再び人的活動が活発化するのには中世以降である。天神田遺跡では 11 世紀末から 12 世紀前半代の瓦器焼成遺構が確認されているほか、上園遺跡で 11 世紀後半から 12 世紀前半ごろの溝跡やピットなどが調査されている。瓦器や棒状土製品は周辺一帯で広く出土しており、国分田遺跡や御笠の森遺跡、薬師の森遺跡など、集落単位での生産が想定できる。

中世後期に入ると、周辺の遺構は減少し詳細が不明であるものの、天神田遺跡で 13 世紀以降の土師器等が出土しており、一帯で何らかの活動が営まれていたと推定されている。



- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|--------------|-------------|---------------|
| 福岡市 | 14. 円入遺跡 | 28. 雉子ヶ尾遺跡 | 43. 原ノ畑遺跡 | 56. 父子嶋遺跡 | 太宰府市 |
| 1. 雑餉隈遺跡 | 15. 春日平田遺跡 | 29. 大野城跡 | 44. 大道端遺跡 | 57. 水城跡 | 69. 成屋形遺跡 |
| 春日市 | 16. 春日平田西遺跡 | 30. 原田遺跡 | 45. 後原遺跡 | 58. 出口遺跡 | 70. 陣ノ尾遺跡 |
| 2. 駿河遺跡 | 17. 春日平田東遺跡 | 31. 金山遺跡 | 46. 御供田遺跡 | 59. 上園遺跡 | 71. 国分松本遺跡 |
| 3. 駿河 B 遺跡 | 大野城市 | 32. 金山古墳 | 47. 池田・池之上遺跡 | 60. 本堂遺跡 | 72. 筑前国分尼寺 |
| 4. 駿河 E 遺跡 | 18. 雑餉隈遺跡 | 33. 金ヶ浦遺跡 | 48. ハザコ遺跡 | 61. 梅頭寮跡群 | 73. 国分千足町 |
| 5. 立石遺跡 | 19. 村下遺跡 | 34. 曲り目遺跡 | 49. 下大利廃寺 | 62. 小水城周辺遺跡 | 74. 島本遺跡 |
| 6. 先ノ原 B 遺跡 | 20. 原遺跡 | 35. 笹原古墳 | 50. 永福遺跡 | 63. 上大利小水城跡 | 75. 神ノ前寮跡 |
| 7. 春日公園内遺跡 | 21. 錦町遺跡 | 36. 釜蓋原遺跡 | 51. 末次遺跡 | 64. 谷蟹寮跡 | 76. 篠振遺跡 |
| 8. 惣利遺跡 | 22. 松ノ木遺跡 | 37. 汐井川遺跡 | 52. 向川路遺跡 | 65. 野添遺跡 | 77. 原口遺跡 |
| 9. 惣利北遺跡 | 23. 榎町遺跡 | 38. 中ノ原遺跡 | 53. 天神田遺跡 | 66. 野添寮跡群 | 78. 前田遺跡 |
| 10. 惣利東遺跡 | 24. ウド遺跡群 | 39. 石勺遺跡 | 54. 谷川遺跡 | 67. 花無尾遺跡 | 79. 宮ノ本遺跡 |
| 11. 惣利西遺跡 | 25. 銀山古墳群 | 40. 瑞穂遺跡 | 55. 唐土遺跡 | 68. 日ノ浦遺跡 | 80. 大宰府条坊跡 |
| 12. 向谷北遺跡 | 26. 原口古墳群 | 41. 国分田遺跡 | | | 81. 推定水城西門ルート |
| 13. 平田北遺跡 | 27. 雉子ヶ尾古墳群 | 42. 古賀遺跡 | | | |

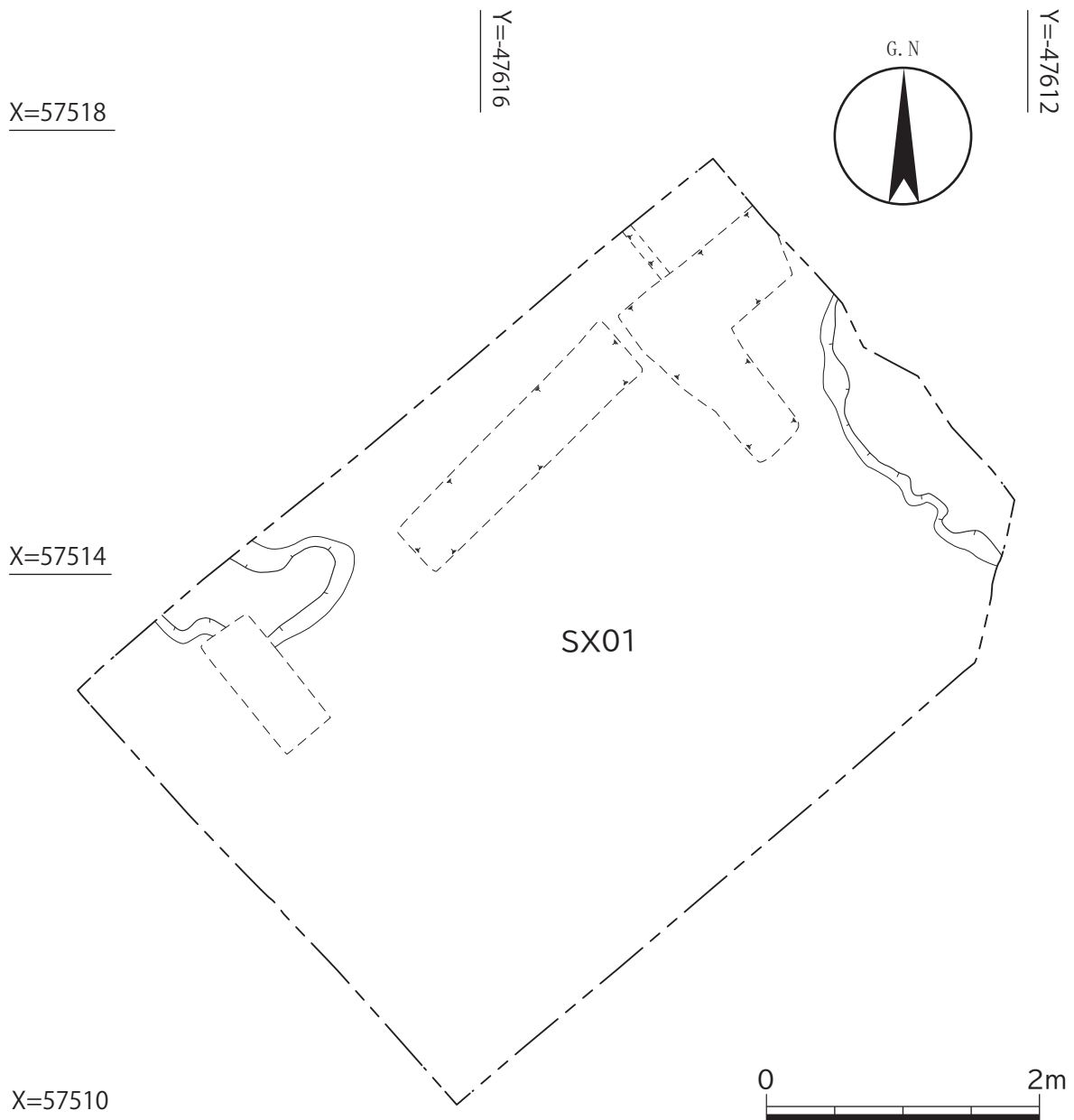
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ．調査の成果

1．調査の概要

調査地は標高約 30 m、水城跡の北西約 300 m の地点に位置する。古代官道の推定ラインからは 15 m ほど東側の地点にあたり、現況では丘陵と平野部のちょうど境目付近となっている。

平成 26 年 11 月 5 日に調査を開始し、7 日にかけて表土掘削を行った。調査区内の土層は現況盛土の下部に近現代の耕作土がほぼ水平に堆積しており、比較的新しい時代に整地が行われたとみられる。遺構面はその下層、地表下およそ 130cm で検出し、暗褐色土が堆積する性格不明の掘り込み (SX01) を確認した。11 月 10 日より遺構の掘削を開始することとなったが、調査区の範囲に対し遺構の範囲が広く、排土の処理が困難であったため、調査区南半と北半に分けて掘削を行う



第 3 図 調査区遺構配置図 (1/50)

こととした。その後 11 月 18 日に遺構の掘り下げを終了、11 月 26～28 日に埋め戻しを行い現場撤収の後すべての作業を終了した。

2. 遺構と遺物

(1) 性格不明遺構 (SX01) (第 3・4 図、図版 1～3)

調査区の北東と北西の一部を除くほとんどの範囲で検出された性格不明の掘り込みである。検出できた範囲から、幅 4.3 m 以上、長さ 5.5 m 以上の規模となる。検出面で地形に沿って南西から北東方向に傾斜しており、掘り下げを行ったところ、明褐色砂質土の地山に 15～20cm 程度の深さで暗褐色土が層状に堆積していた。底面付近では南側斜面上方からの湧水がみられ、また遺構底面は完全に平坦ではなくなだらかな凹凸があり、地山面で埋土の下層と混じっていることから、埋没段階までぬかるみようになっていた可能性が高い。

(2) 出土遺物 (第 5 図、図版 4)

SX01 からはパンケース四分の三ほどの土師器、須恵器、瓦器、瓦などが出土しているが、そのほとんどは摩滅の著しい破片で接合するものはほとんどなく、図化できるものは少ない。層位や出土地点での量の多寡は認められず、遺構床面直上で出土するものはほぼなかった。大多数は斜面上方からの流れ込みによるものと考えられる。出土遺物の時期は縄文時代から中世までであるが、そのほとんどは、須恵器も含めて古代から中世前期までにまとまるものとみられる。

須恵器 (1)

須恵器の杯底部である。器面の調整は粗く、底部にはへら切りの痕跡がそのまま残る。

土師器 (2・3)

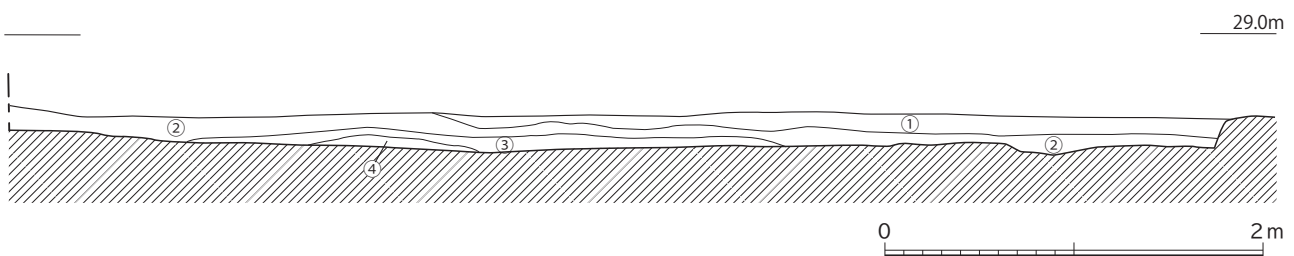
2 は土師器の椀。断面三角形の高台がつく。器面は摩滅しており調整は不明である。3 は皿で、ハの字の高台がつく。

瓦器 (4～7)

4～7 は瓦器椀。4 は口縁部のみ残存。焼成は硬質で内面はまばらにミガキが施される。5 は内面にコテ当ての痕跡が残る。よく燻され内外面は鈍い銀灰色を呈す。調整は粗く高台径がやや小さい。6 は焼成が甘く、軟質。7 は底部から口縁まで三分の一程度残存するが、全体に摩滅が著しい。

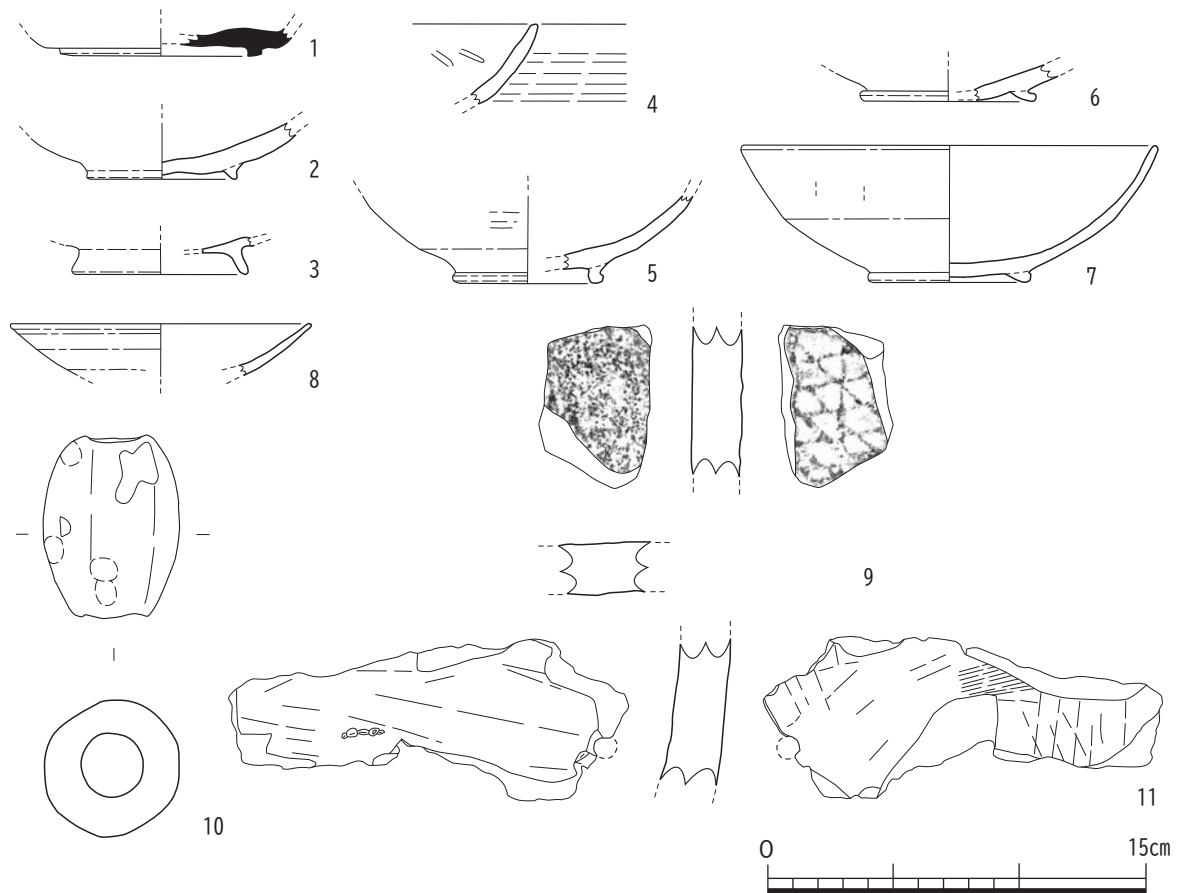
白磁 (8)

8 は皿で、口縁部は緩やかに湾曲しながら薄く広がる。内面から体部外面下位にかけて薄く施



- ① 10YR4/4 褐色 粘性有 しまり有 粗砂を含む
- ② 2.5Y3/2 黒褐色 粘性有 しまりなし 粗砂を主体として褐色土が不明瞭に混ざる
- ③ 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘性強 しまり弱 ②層に似るが粘質土が主体
- ④ 2.5Y4/1 黄灰色 粘性強 しまりなし 粗砂が大半を占め、水分を多く含む

第 4 図 SX01 土層図 (1/40)



第5図 SX01 出土遺物実測図 (1/3)

釉される。太宰府分類Ⅳ-1b。

瓦 (9)

平瓦の破片である。凸面は格子目叩き、凹面は摩滅が激しいが布目の跡が確認できる。瓦は細片で図示していないものを含め複数個体確認しており、このほかに縄目の平瓦も出土している。

土錘 (10)

大型の管状土錘である。孔内部は平滑であるがわずかに凹凸があり、棒状のものに巻きつけて整形したと考えられる。外面は指オサエにより整えられている。重量が 194.4g あり、こうした大型の土錘はこれまで市内では出土していない。

石鍋転用品 (11)

11 は滑石製の石鍋である。底部に近い部分の破片であるが、破断面には外向きに傾斜して穿孔された痕跡がある。

IV. まとめ

1. 遺跡の位置づけ

今回の調査では、古代から中世にかけての古代官道周辺の土地利用の一端を垣間見ることができた。ただし調査範囲が狭小であり、調査区内でSX01の全体像を把握することはできなかった。SX01は自然流路や遺物包含層とも考えられるものの、遺構底面がおおむね平面的であることから人為的なものと判断したい。また出土遺物から、11世紀末から12世紀初頭には埋没したものとみられる。

本調査地の西側には古代官道が通っているが、今回の調査で官道と直接的な関係を示すものは見つからなかった。一方で、谷川遺跡第1次調査で確認された官道側溝のうち、SD03からは11世紀末～12世紀初頭頃の遺物が出土しており、本調査区のSX01も官道が使用されていた時代に存在していた可能性は高い。また瓦が数個体出土していることから、近辺には瓦葺きの建物が存在していたことも想定できる。さらに、調査区一帯は埋没以前にはぬかるみになっていたと考えられ、調査中も南西側の斜面上方から常に湧水が流れ込む状況であった。官道部分では湧水を避ける必要があることから、本調査区の西側には側溝からの排水施設など流水を処理するための遺構が存在する可能性がある。以上、様々に類推することはできるものの、今回の調査結果のみではいずれも推定に留まり、確実な証拠はない。今後の調査に留意したい。

2. 大型土錘について

SX01で出土した大型の管状土錘は、これまで大野城市内で出土している管状土錘よりも数倍の重さがある。孔径は大きく、ずんぐりしていて端部の面がない形状である。民具資料における土錘の集成・分析により漁法の推定を行った真鍋篤行氏の研究によれば、土錘の「孔径（溝幅）2乗」の数値により「刺網系」と「袋網系」の土錘に分類できることが指摘されており、本調査で出土した土錘も「袋網系」の土錘に分類することができる。中でも本品は重さが194.4gあり、管状土錘のなかでも大型の部類に入る。同氏によれば古代以降、漁法の文化が進むことで土錘の大型化が起こることが指摘されており、特に平安末期以降はより大型の土錘が出現することが指摘されている。

SX01からは縄文時代から中世にかけての遺物が出土しているが、その多くは古代以降のものであり時期についても大きく矛盾はないため、本土錘についても古代以降の所産と考えたい。

一方で土錘の使用について、小型の土錘が刺網漁に使用されるのに対し、大型の土錘は強度が求められる地引網などに使用されたことが想定されている。池や沼など比較的水流の穏やかな場所ではこうした大型の土錘を使う必要はないと考えられ、海から離れている本遺跡では、位置づけの難しい資料である。1点のみの出土であり近辺でも類似の資料は出土していないことから、他遺跡から搬入されたものと判断したい。

〈主要参考・引用文献〉

大庭 孝夫 2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館

真鍋 篤行 1996「瀬戸内地方の網業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第9

号瀬戸内海歴史民俗資料館

真鍋 篤行 1997「瀬戸内地方の網業技術史の諸問題（続）」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』
第10号 瀬戸内海歴史民俗資料館

安岡 早穂 2018「土鍾からみた瀬戸内海周辺における網漁の選択性（予察）」『大阪歴史博物館研究紀要 第16号』大阪市文化財協会

和田 晴吾 1982「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』平凡社

第1表 谷川遺跡第5次調査遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径⑤最大径 ※ (残存値)・〈復元値〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	須恵器	杯	SX01	② 〈1.1〉 ④ (8.0)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外 N6/灰色	
2	土師器	椀	SX01	② 〈2.25〉 ④ (6.0)	内外面調整不明 内面コテ当て痕あり	A:1mm以下の白色砂粒、雲母を含む B:良好 C:内外 10YR7/4 にぶい黄橙色	
3	土師器	皿	SX01	② 〈1.5〉 ④ (7.0)	内面調整不明 他は回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒、2mm以下の長石を含む B:良好 C:内外 10YR8/2 灰白色 ～10YR7/4 にぶい黄橙色	
4	瓦器	椀	SX01	② 〈3.2〉	外面ヘラ削り 内面ミガキ 他はヨコナデ	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内 N6/灰色～N4/灰色 外 N6/灰色	
5	瓦器	椀	SX01	② 〈3.5〉 ④ (5.15)	体部外面ミガキ 体部内面ミガキ、ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒、2mm以下の石英を少し含む B:良好 C:内外 N4/灰色	
6	瓦器	椀	SX01	② 〈1.5〉 ④ (7.0)	内面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外 2.5Y8/2 灰白色	
7	瓦器	椀	SX01	① (16.6) ② 5.54 ④ (6.5)	体部外面調整不明 他はナデ	A:3mm以下の白色砂粒、石英を多く含む B:良好 C:内 N8/灰白色～N4/灰色 外 N3/暗灰色～7.5Y5/1 灰色	
8	白磁	皿	SX01	① (12.0) ② 〈2.1〉	内面～体部外面下位施釉	A:精良 B:良好 C:胎土 2.5Y8/1 灰白色 釉 2.5Y7/2 灰黄色 露胎 2.5Y8/3 淡黄色	
9	土製品	土錘	SX01	全長 7.3 幅 5.3 孔径 2.5 重さ 194.4	指頭圧痕 ナデ成形	A:5mm以下の長石を含む B:良好 C:10YR7/2 にぶい黄橙色	
10	瓦	平瓦	SX01	残存長 6.35 残存幅 4.3 厚さ 1.9	凹面布目痕 凸面格子目タタキ	A:4mm以下の白色砂粒、長石を多く含む B:不良 C:凹凸面 2.5Y8/3 淡黄色	
11	石製品	石鍋 転用品	SX01	② 〈6.4〉 残存幅 15.8	内外面ケズリ 穿孔あり		滑石製

写真図版



(1) 調査区完掘状況 (南東より)



(2) 調査区完掘状況 (西より)

図版 2



(1) 調査前風景 (南東より)



(2) 作業風景



(3) SX01 検出状況 (南より)



(1) SX01 北壁土層 (北側)



(2) SX01 北壁土層 (中央)



(3) SX01 北壁土層 (南側)

图版 4



出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	たにがわいせき 3
書名	谷川遺跡 3
副書名	第 5 次調査
巻次	3
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 215 集
編著者名	龍 友紀
編集機関	大野城市
所在地	〒 816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目 2 - 1 電話 092 (501) 2211
発行年月日	2024 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡 番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
たにがわ 谷川遺跡	ふくおかけんおおのじょうし 福岡県大野城市 しもおおり 下大利四丁目	402192		33° 31' 3"	130° 29' 14"	2014 年 11 月 5 日～ 11 月 28 日	62m ²	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷川遺跡 第 5 次調査	集落跡	古代	自然流路	瓦器・土師器・ 土錘	

要約	<p>谷川遺跡は水城跡西門の北西に広がる古代から中世にかけての遺跡である。本調査では、官道近くに広がる広範囲の掘り込みを確認した。掘り込みの性格は不明であるものの、埋没過程でぬかるみ状になっており、官道付近の湧水の処理に関連する遺構である可能性が考えられる。</p>
----	---

大野城市文化財調査報告書 第 215 集

谷川遺跡 3

令和 6 年 3 月 31 日

発 行 大野城市

〒 816-8510 福岡県大野城市曙町 2 丁目 2 番 1 号

印 刷 九州コンピュータ印刷

〒 815-0035 福岡市南区向野 1 丁目 19 番 1 号

